

日本仏教思想史における法然浄土教の位置づけについて

— 称名寺聖教『浄土宗法語』（仮題）を通して〈付・翻刻〉 —

井上 慶 淳

はじめに・問題の所在

本研究は、称名寺聖教『浄土宗法語』（仮題、一一一函―四）を取り上げ、法然浄土教の位置づけについて再考を促さんとするものである。本書は、神奈川県称名寺所蔵（金沢文庫管理）の国宝・称名寺聖教のうちの一書で、漢字片仮名交じり文で記されている。勸化本（談義本^①）に位置づけられる内容を持ち、様々な仏教説話を通して、称名念仏による往生が説かれるものとなっている。

昭和の初期、称名寺聖教から新出の浄土教文献が多く発見された。そのなか、まず法然門流で研究が進められたのは、長楽寺流の隆寛（一一四八―一二二七）および九品寺流の長西（一一八四―一二六六）らの著作である。隆寛の典籍としては『具三心義』『散善義問答』『極楽浄土宗義』『弥陀本願義』が、長西については『観経疏光明抄』『専雅二修義』が新たに翻刻され、彼らの教学に関する議論が進むこととなった^②。ただし、隆寛の著作は一通りが翻刻された一方で、長西についてはその後も未翻刻の典籍が多く残されている状況にあった。それをうけ近年で

は、佐竹真城氏らによって長西およびその門流に関する研究が進められ、長西の著作については可能な範囲で翻刻が完了している³。また、鎮西派第三祖良忠（一一九九—一二八七）の未翻刻文献についても、西村慶哉氏によって翻刻と検討が進められている⁴。

その一方で、本稿で取り上げる『浄土宗法語』は、その存在こそ知られていたものの、これまで稲垣泰一氏による論攷が一本確認されるにとどまり、本文も未翻刻の状況にある⁵。また稲垣氏は、説話文学研究の一環として本書を取り上げている。すなわち、浄土教典籍としての本書への言及は、未だ皆無の状況なのである。その理由としては、まず本書の撰者が誰なのか明らかでない点が挙げられる。加えて、その内容が「勸化本」に位置づけられるものであり、いわゆる「教学書」とはやや趣を異にすることも一因であったように思われる。

そのうえで本稿では、これまで等閑視されてきた『浄土宗法語』が、法然浄土教を考察するうえで重要な内容を持つていることを報告したい。というのも、後述するように本書の著者は、「浄土宗」を自認し、かつ法然の「選択」思想をうける人物と考えられる。しかし本文の多くが、法然以前の思想状況において成立したとされる平康頼『宝物集』に大きく依拠しているのである。つまり、法然の思想をうける人物によって作成された勸化本の大半が、法然以前の文献をもとに作成されていることになる。この事實は、日本仏教思想史において大きな転換点とされる法然浄土教の位置づけを考えるうえで、非常に示唆に富むのではないだろうか。

以上の問題をうけ、本稿ではまず、『浄土宗法語』の概要ならびに先行研究を確認する。そのうえで本書の撰者が法然門流の人物であると考え得ることを指摘し、内容の問題についても多少しく検討を加えたい。また、今後の研究に資するべく、本文の翻刻を掲載する。

『浄土宗法語』の書誌について

本書の書誌については、すでに前述の稲垣氏の論攷において報告がある。また筆者も、令和七（二〇二五）年十二月十八日に実見調査する機会を頂戴した。それらをうけ、『浄土宗法語』の書誌を示すと以下の通りである。

〔所蔵〕 神奈川県横浜市称名寺蔵、金沢文庫管理。

〔冊数〕 一冊。

〔装丁〕 袋綴装。四つ穴綴じ。

〔料紙〕 楮紙。

〔丁数〕 墨付二十五丁。（首部・末尾ともに欠損。一丁目についても、表が欠損。）そのほか、表紙・裏表紙および前後の一丁分の遊紙が後補されている。

〔法量〕 縦二十九・五cm、横二十三・二cm。

〔行数〕 一〇～十三行。

〔文体〕 漢字片仮名交じり文。

〔年代〕 鎌倉初期～中期。

〔その他〕 虫損・破損が激しく、補修がなされている。裏表紙の直前にある遊紙には、「昭和三十三年十月十日県費ヲ以テ修理ス」とあり、虫損・破損部分には全面的に裏打などの補修が施されている。補修の際に四つ穴綴じになったと推定されるが、それによりノドの見えにくい丁がある。

先行研究の確認

それでは前述の稲垣氏の論攷について、その内容を確認する。本稿に関わる指摘として、以下の四点を挙げておきたい。

- ① 撰者は浄土宗の僧侶であり、かつ叡山浄土教の流れを汲む者と考えられる。
- ② 内容について、その素材の多くを『宝物集』から採用している。
- ③ 成立時期は、十二世紀最末期から十三世紀初頭と推定される。
- ④ 本書が想定する読み手は、都に住む者や僧侶ではなく、田舎の山中などに住む女性である。

これらのうちまず①の撰者について、『浄土宗法語』には、

此浄土宗は、是善導和尚の勤行して往生を遂げて、後の門徒の人、併ら往生極楽の本懐を遂げず。

(十五丁裏一〇行)⁶⁾

という記述のほか、

唯浄土宗の行者と申すは、称念を先とする也。身口意の勤め、余行にすぐる也。

(十七丁表二行)

とも示される。ここでの「浄土宗」という語やその内容から、本書は浄土宗を自認する者によって記されたことが窺われる。加えて本書には、

されば我山の源信僧都、一代聖教に曇り無く、顕密二道に暗からず…

(十九丁表三行)

という内容も見られる。源信（九四二—一〇一七）を指して「我山」と称していることから、叡山浄土教の流れを汲む者であることも知られる。以上の点から『浄土宗法語』は、叡山浄土教の影響下にありながらも、浄土宗に身を置く者によって撰述されたと指摘されている。

次に②について、『宝物集』とは平康頼（生没年不詳）によって著された仏教説話集である。諸本が多く現存しているが、それらは一卷本↓片仮名古活字三巻本↓第一種七巻本という順序で、平康頼自身によって改訂がなされたものと考えられている。⁷⁾ 稲垣氏は『浄土宗法語』が、それらのうち第二種七巻本と密接な関係にあることを両書の引用によって論じており、この指摘は疑う余地がない。なお、第二種七巻本の成立については、文治四（一一八八）年までに成立していたとの指摘がある。⁸⁾ そのうえで稲垣氏は『浄土宗法語』の内容について、

『浄土宗法語』はその本文を主に『宝物集』に依拠しながら記述し、典拠に関する部分は当時の浄土宗における説教・唱導や法会の場合などで語られ、共通に理解されていた知識を述べたり、他の文献からの孫引きであると考えられよう。⁹⁾

と指摘する。一方で、「かなり『宝物集』を咀嚼し、縦横に駆使して成された教導書であるといえる」¹⁰⁾とも評されるように、『浄土宗法語』は単に『宝物集』の説話を機械的に転載したわけではなく、様々に組み合わせながら独自の構成とし、教説を展開していることに留意しておきたい。

次に③について、『浄土宗法語』十九丁表—二〇丁表にかけては、源太夫の説話、そして神崎の遊女とねぐるの説話、の二つが続けて示されている。これは『宝物集』と同じ構成であり、加えて内容もほぼ同文であるため、『浄土宗法語』が『宝物集』に依拠していることの証左となる。しかし、『浄土宗法語』における遊女とねぐるの説話の最後にある「無下に近き事にて侍るなり」（ごく近い時のことであります）という一文は、『宝物集』には確認されない。すなわち、『浄土宗法語』が自ら挿入した文と考えられる。そしてその遊女の今様や説話は、後白河院

(一一二七—一一九二)が撰述した『梁塵秘抄』『梁塵秘抄口伝集』に出てくる。以上の状況から、稻垣氏は『浄土宗法語』の成立を十二世紀最末期から十三世紀初頭と推定している。

最後に④の読み手については、以下の記述から知られる。

此文には、為中(田舎)の山里などの愚なる女人の、善知識にあふ事かたく、法の音を聞く事かたきが故に、念仏すべきが料に書き集めたる也。みやこなどの功德盛りに聴聞などの広からむが為に非ず。また僧徒の為に非ず。此の物語は、正教をはなれずとは云へども、読み吉からんが為に言を和らげて文字をそむきて心ばへを取たる也。
(十四丁表三行、カッコ内は筆者挿入)

ここでは『浄土宗法語』執筆の目的が記されている。すなわち本書は、田舎の山里などに住む女人で善知識に遇って仏法を聞くことが難しい者のために執筆されたと述べられている。加えて、都に住む者や僧侶を対象としていないともいう。以上の点から本書は、「京都周縁に隠棲した女人や、中・下級階層の俗人を対象にした、教導的色彩の強い作品」と評される。

以上、稻垣氏によって指摘された内容を確認してきた。いまここで筆者が注目したいのは、『浄土宗法語』が依拠する『宝物集』の、日本仏教思想史における位置づけである。この点について、山田昭全氏は以下のように述べている。

『宝物集』は、阿弥陀様の事を盛んに説いていながら、物語の始めと終わりの締めくくりの所では、お釈迦様を出しているのが大変象徴的だと思います。そこに法然の浄土教が鎌倉仏教の中に定着・確立する直前の伝統的な平安朝仏教の姿を認めることができるというわけです。(中略)『往生要集』なくして『宝物集』は成立しなかつたと言っても過言ではないのです。ただ、私が強調したいのは『往生要集』一辺倒ではなくて、そこには永観の浄土教が入り込んでいるということなのです。(中略)『宝物集』は、『往生要集』に次いでこの永観から

も大きな影響を受けています。『宝物集』に永観は出てきても、法然という人物は影も形も現しません。これが実に面白い。康頼は法然より、十二、三歳若く法然の活躍の極盛期を目前にしているはずなのに全く触れていないのです。¹²

この指摘に従えば、『宝物集』は源信『往生要集』や永観の浄土思想の影響を受けながらも、法然浄土教の確立以前の仏教の姿を留めているということになる。つまりここにおいて、「浄土宗」を自認する人物が、その多くを法然以前の資料に依りながら『浄土宗法語』を執筆した、という構図が見えてくるのである。

そのうえで次節においては、本書の撰者ならびに出典に関する問題について少しく検討したい。

『浄土宗法語』の内容検討

(一) 撰者について

前述の稲垣氏の指摘の通り、『浄土宗法語』の撰者は、叡山浄土教の流れを汲む浄土宗の人師と考えられる。そこで問題となるのが、本書に二度出てくる「浄土宗」の語が具体的に何を指しているのかという点である。というのも前節で確認したように、本書は稲垣氏によって、その成立を十二世紀最末期から十三世紀初頭すなわち鎌倉初期と推定されている。しかし当時の「浄土宗」という呼称は、必ずしも一義的な宗派の概念を意味するとは限らない。それゆえそこに出る「浄土宗」¹³「法然門流」と理解できるのかを確認する必要がある。この点については、以下の問答が手がかりとなる。

問。賢首仏の浄土の莊嚴に比れば、極樂は下品也と云へり。釈迦の五百の大願に並れば、弥陀の四十八の願は物のかずに非ず。なんぞ極樂を願へとおしへ、弥陀悲願を仰ぐべきと云ふや。

(十七丁表七行)

ここではまず問いとして、賢首仏の浄土や釈尊の五百大願に比して劣る阿弥陀仏の浄土と四十八願を、どうして願い、仰ぐべきなのかと示される。それに対し、次のように回答している。

答。賢首仏の浄土は極楽に勝ると云へども、我等衆生、誓浅し。過去に世遶王仏と申す仏の十方の浄土を現じ給ふを、弥陀見給ひて、其中に奇妙の莊嚴をえり取りて極楽を合成し給ふ也。(中略) 賢首仏の浄土奇妙也と云へども、只有縁の極楽を願へ。釈迦の五百の大願は忝しども、弥陀の来迎引撰の願云、十悪五逆犯者也と云へども我名号を唱て我国を願者の往きて迎へずと云はば、正覺をとらじと誓ひ給へる。この故に弥陀を称念すべしと云ふ也。(十七丁表九行)

ここでは、賢首仏の浄土が弥陀の浄土よりも勝れているとしつつも、われら衆生は有縁の弥陀浄土を願うべきであると示されている。そのなか注目されるのが傍線部で、「えり取りて」(原文「エリ取_テ」)という表現が確認されるのである^⑧。これは法然の提唱した「選択本願念仏」の思想を想起させる。そして前後の内容としても、〈無量寿経〉所説の法蔵説話が示されており、それは『選択集』本願章の教説と軌を一にするものである。

以上の点からすれば、本書における「浄土宗」とは、そのまま法然が立てた浄土宗を指すものと理解するのが妥当であろう。したがって本書の撰者は、法然門流に関係があり、かつ「選択本願念仏」の思想をうける者であったと考えられる。これらの点に加えて、本書の成立を稲垣氏の指摘する「十二世紀最末期〜十三世紀初頭」とした場合、その人物が法然の直弟であった可能性も十分に想定される。

(二) 十一の問答の出典について

『浄土宗法語』の現存部分には、十一の問答が確認される。それらの問いの部分を示すと以下の通りである。

問①人界に生を受け、仏教に値うことをよるこぶべきとは、どういふことか。(一丁裏六行)

問②「念仏」とは、いずれの仏を念ずるのか。(五丁表一行)

問③「阿弥陀」の三字は短く約つづまやかなのに、どうして称念する者が往生できるのか。(六丁表二行)

問④仏ならびに浄土は十方に存在する。それなのにどうして、阿弥陀仏一仏を勧め、その極楽浄土への往生を願えというのか。(八丁表六行)

問⑤『阿弥陀経』に、「少善根の者は往生し難い」といわれている。どうして、纒むすかな阿弥陀仏の名号を称えるだけで往生できるというのか。(九丁裏二行)

問⑥臨終の十念が、どうして百年の観行よりもすぐれているといえるのか。(十四丁表九行)

問⑦臨終の十念は、前世の宿因による。それゆえ、臨終以前は念仏を修していなかったとしても、縁があれば臨終に十念を具足し、往生できるのではないか。(十五丁裏十二行)

問⑧中国の并州で生まれた者は、七歳になれば阿弥陀仏を念ずるようになり、それゆえ往生するという。しかし、どうして七歳ばかりの子供がその功德を知ることができようか。(十七丁表三行)

問⑨賢首仏の浄土の莊嚴に比べれば、阿弥陀仏の極楽浄土は劣るといわれている。また釈尊の五百大願に比べれば、阿弥陀仏の四十八願は、物の数に入らない。どうして阿弥陀仏の浄土を願えと教え、その四十八願を仰ぐべきというのか。(十七丁表七行)

問⑩『阿弥陀経』に、「極楽浄土では、阿弥陀仏が常に法文を演説すると説かれ、それを聞く者は仏道を増進する」といふ。川の音や風の声はどれも妙文をとなえており、阿弥陀仏は無量寿仏とは…(以下、湮滅)。

(二十五丁表六行)

問⑪金翅鳥の宮殿は七宝をもって合…といわれている(以下、湮滅)。(二十五丁裏一行)

これらについて稲垣氏は、いずれも『宝物集』に示される内容を、問答の形式にしたものと指摘する。しかし管見の限り、問⑤と問⑨については、現存する『宝物集』諸本に同様の内容を確認することができない¹⁴⁾。すなわち、典拠が『宝物集』以外にある、もしくは『浄土宗法語』が独自に入れ込んだ問いであると推定される。

とはいえ問⑤・⑨の内容を見れば、その問い自体は、法然に至って初めて問題となったものとは、必ずしも考えがたいものである。また、問⑨に対する答えの部分において、前述した「選択」思想が確認されるが、それがただちに本書の教説の中心をなすものとは言いがたい。

以上の事実は、『浄土宗法語』執筆の主たる目的である「田舎に住む人々に、称名念仏一行による往生を平易に説く」という課題が、すでに法然以前の資料によってかなりの程度達成されることを示している。ここにおいて、「法然浄土教の革新性はどこにあるのか」という課題が、必然的に浮かび上がってくるのである。

おわりに・今後の課題

以上、これまで等閑に付されていた『浄土宗法語』が、法然浄土教の位置づけを窺うにあたって重要な内容を持つ史料であることを報告した。唯一の先行研究といえる稲垣泰一氏の論攷では、撰者が「浄土宗」の人物であると、そして多くを『宝物集』に依拠していることなどが指摘されていた。

それをうけ今回は、本書が法然の「選択」思想をうけている可能性を提示し、その撰者を法然門流内の人物に比定できることを指摘した。また、『浄土宗法語』に見られる十一の問答のうち、『宝物集』に典拠を見出しがたい問の内容が含まれていることを確認した。しかし、それらの問いはいずれも、必ずしも法然浄土教の成立によって初めて提起されたものとは言いがたく、また本書の教説の核心をなすものとも考えにくいものである。

このように、法然門流の人物が著したであろう勸化本が、その叙述および思想の多くを法然以前の『宝物集』に依拠しているという事実は、法然浄土教がそれまでの浄土教との断絶の中に成立したのではなく、その連続性のように展開したことをおのずから示しているといえるだろう。また本書が、田舎の山里に住む民衆を想定して著されていることは、法然浄土教が民衆のどのような層へ展開し、受容されていったのかという点においても注目に値する。以上のような特徴は、これからの法然浄土教研究において、法然以前の院政期浄土教にも視野を広げる必要があること、さらに、いわゆる「教学書」に限らず、勸化本を含めた総合的な検討が求められることを提起している。

もつとも、本書の成立を通して浮かび上がる「法然浄土教の革新性はどこにあるのか」という問題は、特に黒田俊雄氏による顕密体制論の提唱以来、今日まで繰り返し論じられてきたもので、新奇のものではない。しかしながら、『浄土宗法語』という、これまでほとんど注目されなかった史料を通して、あらためてその再検討が促される点に意義があるといえるのではないだろうか。

なお、今回は紙幅の制約から、『浄土宗法語』を通しての問題提起にとどまることとなった。本書が提起する諸問題の検討を今後の課題とし、ひとまず本稿を終えたい。

『浄土宗法語』翻刻

【凡例】

- ① 本翻刻は、称名寺聖教『浄土宗法語』（仮題、一一一函—四）を翻刻したものである。
- ② 漢字は基本的に新字の通行体に統一し、略字などは正字に戻して翻刻した。
- ③ 各丁数はへゝで括って示し、行取りは原本に準じて行頭に行数を示した。
- ④ 本文抹消箇所については、本文内に取り消し線を付して示した。
- ⑤ 翻刻に使用した各種記号が示す意味は次の通りである。
 ・「□」↓湮滅箇所／・「┐」↓合符
- ⑥ 湮滅箇所について、文字数が判断できる場合にはその数だけ「□」を示し、判断できない場合には「□…□□」と表記した。
- ⑦ その他、特に必要な情報を示す場合、脚註に記した。

【本文翻刻】

へ一丁裏

- | | |
|--|---|
| <p>01 □…梵天<small>ヨリヲテ</small>糸下大海底針穴貫如<small>シ</small></p> <p>02 □…也一眼<small>ノ</small>亀浮木穴<small>ニ</small>值似<small>タリ</small>サレハ教主釈</p> <p>03 □…法花經説給<small>シ</small>ニモ九億衆生有<small>リ</small>三億名字<small>ヲ</small></p> | <p>04 □聞也我等濁世未代云<small>トモ</small>宿縁引<small>ニレテ</small>人家生受<small>ニ</small>仏教値<small>ニ</small></p> <p>05 □事得<small>ヲタリ</small>悦可悦<small>ニ</small>樂可樂国也無下<small>ニ</small>仏法名字知<small>モ</small></p> <p>06 □…浅<small>シ</small>□□人界生受<small>ニ</small>仏教奉<small>ヲ</small>値悦樂<small>ニ</small>云何<small>ハナル</small></p> <p>07 □…入<small>ルハ</small>□悟也天人樂<small>ハニ</small>フケテ<small>ヲ</small>仏受<small>ヲ</small></p> |
|--|---|

08 □ □ □ 畜生愚智 仏法ヲ

09 □ □ □ 苦患雖忍ヒ

10 □ □ □

〽二丁表

01 書シテ正道門可入也我等積尊栴檀煙昇給テ後二千余

02 年生受暗ヨリ晴向云トモ一乘妙典值奉テ心伝耳触口唱

03 □ 船得如父母值如クタノシミテ立ラ岨水ウルヲフ譬ヲ以テ仏道

04 近付ケル勿疑ニ即往安世ト界說極樂往生ニ事待セム即往安樂世

05 界ト即往都率天宣天女来迎心カクヘキ也無ニ亦無三云ト

06 法花最第一言如来金言也積尊無虛妄舌也各疑コト無

07 勤行スヘキ実長安宮人一品切留花滋国者死人頭供

08 養ケルモ理ニ侍ヘキ此経勤行ヘキ有様法師安樂行品ヲ口ク侍メ

09 先五演具足シテ勤行キ五演者衣食具足也遅々春日終

10 日食エサレハツカレニ望力無慢タル秋夜衣薄レハ寒セメラレ

11 テ読誦思忘ル以テ衣食足云也二持戒清淨也

12 □ 数可□ □ □ 悲无ラム人ハ彼提婆□

〽二丁裏

01 多カ六□ □ □ 読カトモ無□ □ □ 如□ □ □ 此故持戒也

02 云也三者常居閑処也常閑□ 所心居心乱心無読誦也

03 山林睡眠仏歛喜聚洛諍心仏憂惱云如四者ソムシヨ

04 エムムナリ諸エムト云妻子眷属資財資具如是一七珍

05 万宝投捨一向読誦也五者得善知識也善知識者我為

06 意安現世後生時至ヨクアタル人也心叶事有云ナコ

サメテ

07 腹不立自忘念不発制止万事復易命終時

08 往生スメ如是人云也サレハ法花経善知識者是大因

縁説也

09 如是信心尽疑タチテ読誦人決定淨利往生仏道至

10 門可入也口名号含身清淨衣着幡懸香焼花散

11 妙法経行奉様清淨読奉申侍積普明説如

12 証普賢六牙白象乘道場現長禪師清淨ニ

〽二丁表

01 行天諸童子顯給仕如是利益不思議也天竺

02 震旦我朝檢記見天竺一人国王御仏法名字不

03 知^ニ 故人名曰惡毒王教主^ト 釈尊此事^ヲ 愍引撰^{セム} トシ給^ニ

04 御力不及^ニ 毒王^ヲ 牛好^ニ 飼事亦他念^シ 無迦葉舍利弗目

05 連三人御弟子^ヲ 遺構給事^ヲ 有迦葉^ヲ 牛成^ニ 舍利弗^ト

06 主^ト 目連^ヲ 牛飼^ト 成生名^ト 妙法名^ト 牛主^ト 蓮花名^ト 牛

07 飼名^ト 經名^ト 毒王^ト 奉毒王^ト 牛得愛^ト 程不^ニ 心^ト 此名^ト 呼問

08 妙法蓮花經^ヲ 五字^ヲ 唱毒王^ト 病受^テ 琰摩王^ト 宮參^ニ 時大

09 王玉^ヲ カフリ^ヲ 傾^テ 無量無數劫^ト 值奉^ル 雖一乘^ノ 妙法蓮花經^ヲ

10 口フレタル人も速^ニ 惡趣免^ニ 淨利往生^ス 言震^ル 日国^ニ 宗

11 法師^ヲ 法花經^ヲ 誦讀^ス ルニ 羽^ヲ 撫^テ 極樂^ノ 教^ヲ

12 皇御時^ニ 經三千部^ヲ 誦讀^ス

〈三丁裏〉

01 沙門内供^ヲ 奉中大納[□] シヲウケスシテ申留^ッ

02 沙門イカリヲ含^テ 三千部[□] 經三分^ニ 一千部^ヲ 以テハ 国王^ト

03 生一千部^ヲ 以テハ 伴大納^ヲ 罰一千部^ヲ 以テハ 仏法修行^ニ 後生^ス

04 資糧^ト 死沙門^ヲ 任願力^ニ 清和天皇^ト 生伴大納^ト 言伊

05 豆國^ノ 被流サテ後^ニ 遁^ハ 丹波国^ノ 水尾^ト 云所籠^ニ 居難^シ 行

06 苦行セサセ給^ル 故此御門^ヲ 水尾御門^ト 申^ラ 惡念^ヲ 以^テ 廻向^ス 猶

07 違事無^シ 況往^ニ 生淨利廻向^ニ 人是違^ニ コト有^ル 不空^ノ 三藏儀輒[□]

08 六万九千余文字^ヲ 誦讀^ス 舌サキヨリ金色^ト 仏成^テ 出給^テ 首上^ニ

09 〇ホ〇テ照給^ハ 無始^ノ 生死罪障^ヲ 消失^ト 侍返^テ 々憑^テ 侍サレハ

10 〇〇能^ク 慎清^ニ 淨^ニ 無量無數劫^ト 值遇^テ 奉難^キ 一乘妙法蓮花

11 經奉^テ 值遇^テ 心任^ニ 受持^ス 誦讀^ス 事歡喜^{シテ} タカカラスヒ

12 〇〇常中^ニ 音讀^ス 奉^テ 誦^ス 申^ル メルサテカ[□] テタキ經^ヲ

〈四丁表〉

01 〇口魚鳥香不可^ク 奇衣不^レ 淨物[□] スシテヨク^ク

02 精[□] セスシテ奉^テ 誦^ス 者利益^ヲ ソク有^ル 所[□] 仏法^ハ

03 ソシリ奉^テ 逆縁^ト 成侍^ト 憑^ケ 侍^ト 彼不^レ 輕大土^ヲ 打奉^シ

04 五百^ノ 上慢^ニ 終^ニ 利益^ヲ 顧^ル 千劫^ヲ 於阿毗地^ニ 墮^セ シカ□

05 ナニ、カハシ侍^ヘ 地獄^ノ 苦患^ヲ 始^メ 等活^ル 黑繩^ヲ タヘ忍^ヘ カラス

06 申ヤ阿鼻^ノ 大城^ニ 千劫^ニ 侍^ラ 悲成^{シテ} 知侍^ヘ キ也^ト 彼地獄^ニ 一日

07 一夜^ト 申^ル 此人^ノ 間六十劫^ヲ 当侍^{ナル} 一時^ト 申^ル 五劫^ニ 侍^{ナル} 頭

08 下^ニ 是上^ニ ヲツル事^ニ 二千年^ノ 地獄^ノ 深事^ヲ 知^ル 受^{コト} 苦^ニ 間無^シ 説^ケ ヲ

09 苦ウケヌ所^ヲ 芥子^ノ ヲリモ少^ク 猛火^ノ 体^ヲ コカス人間^ノ 火水^ノ 如^シ

10 寒水身^ヲ 閉娑婆^ノ 水火^ノ ヲモアツシ阿妨^ノ 羅刹^ノ 嗔^ル 体見^ル

11 肝摧^キ 牛頭馬頭^ヲ ケケワ[□] 〇〇[□] 聞^ル 肝失^フ コマカニハ恵^心

12 往生要集[□] 此真言[□] 記^ノ 二門^ノ 正道門^ヲ 申^テ タカキ

〈四丁裏〉

- 01 成仏門也譬 撰政関白□□大□ナントノ四位五位前
 - 02 駟其数具宮人番長□□ハラハセテ陽明門 左衛
 - 03 門陣ヘテ参給 如其外忍辱精進持戒檀施
 - 04 □□多 念仏門申門 恒極楽往生門 侍
 - 05 譬 アヤシキ夫宿直ナレトモ上東門ナント云小門入制
 - 06 人無如念仏門モ又如此六字ナルカ故師不受万返千返
 - 07 唱トモ正違無本無レトモ不忘臥念仏赴唱トモ答無シ
 - 08 清浄 称念 利益莫大也不浄 唱トモ答有事無シ
 - 09 散心念仏物往生キラワス況一向専修ノ人サレハ正道ニ
 - 10 趣 仏道求大根上根人不知 極楽往生 三途古郷
 - 11 不還極楽人民生漸仏道入 思下根小根者此念
- 〈五丁表〉
- 01 仏可勤行一也問念仏云何仏念 答念仏云阿弥陀仏
 - 02 称念也極楽云弥陀淨利也極楽願者何恭敬奉
 - 03 加之二弥陀娑婆有縁仏 極楽娑婆衆生契有国也極楽
 - 04 淨土始也娑婆エ土終也順道 故輒淨土進也爰以テ
 - 05 一代聖教弥陀恭敬極楽可願云 難陀国 波瑠璃王大聖

- 06 牟尼尊申而言自参申侍ヘキニ国政間無 御使申侍也
- 07 何 仏成侍ヘキト申給侍ケレハ百八目患子以阿弥陀仏名
- 08 号唱給ト被仰ケル委目蓮経見 跋陀和菩薩阿弥陀
- 09 如来向奉末代衆生何 仏可奉見ト申給ケレハ我
- 10 名号唱ト被仰ケル般舟三昧経 欲来生我國者常
- 11 念名号説是也法照禪師□□大聖竹林寺詣生身
- 12 文殊□奉末来衆生□：□ 尋申給ケルニ

〈五丁裏〉

- 01 阿弥陀仏 称念スヘシト被□：□大聖竹林寺記見
- 02 一代教主 釈迦安養淨土弥□□覚母文殊無虚忘詞
- 03 以教給 弥陀称念 極楽可求一也加之二薬師八人菩薩
- 04 極楽送契手 我本師阿弥陀如来念奉ヘシト教
- 05 普賢面見彼仏阿弥陀唱ヘテ安楽国願龍樹十二礼ツクテ故
- 06 我頂礼弥陀 仏拜給双卷経観無量寿経大阿弥陀経
- 07 小阿弥陀経法花経花嚴経法鼓経維摩経摩訶経千
- 08 手経不空羂索経悲花経馬鳴菩薩起信大乘論懷感
- 09 禪師郡疑論導禪師安樂集慈恩大師西方要決天
- 10 親菩薩 往生論瑞応伝新修伝戒珠伝永観律師十因保

11 胤入道往生伝江師郷続往生伝三善為康ヲ捨遺往生伝
12 至彌陀称念奉極樂ヲ願ヘト勸委加財浄土論教又

〈六丁表〉

01 恵心往生要集見タリ諸教所讚多在弥陀云ヘリ事新

02 経論引不能知往生求者弥陀称念ヘシト云事問何カハ

03 阿弥陀三字少ツマヤカナリト云トモ称念者必往生

極樂云

04 答阿弥陀三字是少云トモ三世諸仏也三身如来也三因仏性

05 也三部諸尊也空假中三諦也三菩提因也三界出知目也三途

06 離行也故一念間八十億劫生死罪除滅安養淨刹往生

07 也一証摺申ヘキ也悉達太子金剛座上菩提樹下正覺

08 成給後浄飯大王一代教主釈尊ヲ持奉万事宜

09 様問奉給ケル中何ニシテ侍申合給アレハ阿弥陀

10 仏名号唱給ヘシト被仰ケレハ浄飯大王釈尊恨奉一代聖教

11 多有中僅彌陀名号勸□□我器非アサムキ

12 給申給ケレハ釈尊畏恐□□様譬伊蘭云樹

〈六丁裏〉

01 其香クサクシテ聞者毒氣忍□□一葉用力如是

02 其伊蘭四十里間ムラカリシケ□□梅檀云樹葉纒ア

03 シノツノ様ツノクミ□□末二葉及香ナツカシク

カウハシクカ

04 ヲリテ四十里伊蘭毒香消失忍ヒ臥者イキカヘラムカ如シ

05 十惡五逆重罪四十里伊蘭如ムラカリシケルト云ヘトモ

06 弥陀梅檀香少云ヘトモ十惡五逆毒消失如申候

07 サレハ維摩經三千世界衆生阿難如多聞第一成此諸

08 衆生各劫命与説阿弥陀功德不可尽トハ申タルナリ

09 念仏功德少□□人助導引事也少々檢申ヘキ也昔

10 一世界間仏法名字不知好罪造此人漸年蘭齡傾テ

11 病為悩シム時火車目前現地獄迎得此人此事恥悲

12 俄善知識尋語云我一世界間仏法不信テ罪作数

〈七丁表〉

01 不知今命終時地獄苦患ヲ得タリト悲善知識教言

02 罪作レハ地獄相現ス南無阿弥陀仏十度申セト勸未タ

03 十念満善知識問云只今何相現ル罪人答云火車ナ

- 04 カヘヲカヘシテ蓮花台來迎^ト申^{ケル}造作五逆罪
 - 05 得聞六字名火車自然去花台御來迎^ト説^ハ是也法
 - 06 鼓經意^ヲ以^テ弘法大師書給侍筆也善導和尚往生礼
 - 07 讚^ニ下輩下行下根人十惡五逆等貪瞋四重倫僧誦
 - 08 正法未曾慚愧悔先憊終時苦相如雲集地獄猛火罪
 - 09 人前忽求往生善知識急勸專称彼仏名化仏菩薩尋
 - 10 声到一念傾心入宝蓮三業障重開多劫于時始發菩
 - 11 提因^又此文意^ハ下行下根者^{□□}五逆犯^ヲ者貪瞋
 - 12 者僧物ヌスメル者正法ソシ^{□□}時地獄苦相如雲
- 〈七丁裏〉
- 01 集^{マテ}彼罪人前現^{セム}時俄善知識^{□□}名号唱化仏菩薩
 - 02 声尋來給罪人一念心^{□□}多劫重罪消失宝
 - 03 蓮台中入始菩薩因^ヲ開也^{□□}十往生經云山海惠菩薩
 - 04 阿難告言若有人阿弥陀仏念奉^リ往生願^者我今^コ
 - 05 後常廿五菩薩遣護^{シメテ}惡鬼神ナヤマサシムル事無^{クシテ}
 - 06 安穩ナラシメムト云^{ヘリ}常思十六相觀凝鎮憑四十八願^ニ
 - 07 カ[□]ヘシ觀念阿弥陀仏相海三昧功德法門申文阿弥陀
 - 08 仏名^一二万二万三万五万乃至十万又百返專念^{セム}モ決

- 09 定往生^ス侍^{レハ}一向專念^人往生疑成事ナカレ大法積
 - 10 經云雖不專念無量寿仏亦非恒種衆多善根隨己修行
 - 11 諸善功德廻向彼仏願行往生此人臨命終^ノ授受引導
 - 12 文意^ハ專無量寿仏念^セト云^{トモ}功德ツクラスト云^{トモ}隨堪^ニ
- 〈八丁表〉
- 01 ツクラム事功德少^{トモ}阿弥陀仏廻向奉^ハ命終時必^スミ
 - 02 チヒキ給^ヘ侍^メレハ少善根我等憑^ク侍^ヘ此三念仏三昧
 - 03 云名号唱^ハ形象觀悲願仰^ノミニ非スヘテ弥陀思
 - 04 係奉^{ケリ}爰以大無為論^ヲ去七十余家積^ニ
 - 05 繫念弥陀尊即得生極樂最緣深厚者決定無有疑^ト
 - 06 申タル也問淨土十方有諸仏又然^{ナリ}往生求者何^{ナレハ}弥陀
 - 07 一仏勸極樂願云答仏菩薩^ニ皆本願云事侍也釈迦地獄
 - 08 衆生愍^マ苦患代誓^ヒ和花嚴經云^ニ々地獄中經於無量劫
 - 09 為度衆生故而能忍是苦云是也藥師医王クスリヲサツケ
 - 10 貪瞋痴三毒^ノ病喻故藥師經^ニ一經其耳衆病悉除^ト
 - 11 說^{ケリ}普賢懺悔業障願有^{リテ}罪如霜露患日能消除^ト
 - 12 誓給地蔵今世後世能^{□□}有三途衆生導給^フ

〈八丁裏〉

- 01 十方三世仏菩薩ハ如此悲□：□陀如来本願悲願
 - 02 ト申我名号唱生願者十惡五逆犯云ヘトモ往不迎
 - 03 □正覺ヲ不取誓給ヘリ此本願依故弥陀称念極樂
 - 04 願ヘトハ勸也其仏本願力聞名欲往生皆悉到彼国自致
 - 05 不退転是双観経文也サレハ慈恩西方要決諸仏願
 - 06 行成此果名但能念号具包衆徳ト申也弥陀既正
 - 07 覚成給ヘリ悲願不可疑我等无始生死此四重五逆
 - 08 罪重故十方三世諸仏簡捨奉生死苦患受今
 - 09 四重五逆ヲ簡給ハス称念者迎云悲願アヘリ弥陀一仏
 - 10 念奉極樂ヲ願ヘトスメサラム突名号称念功德不淺侍ヘル
 - 11 釈迦名号唱者即菩薩也云一日地藏ヲ称スル功德俱胎劫
- 〈九丁表〉
- 01 中諸空智者讚功德マサルト説又但聞仏名二菩薩名
 - 02 除無量劫生死之罪何況憶念侍二菩薩申観
 - 03 音勢至阿弥陀御弟子也申サムヤ本師弥陀如来名号
 - 04 称功德知行ヘキ也サレハ自余衆行是セムト名ニ云ヘトモ
 - 05 若念仏並秘交非申也我等雖不修善根未犯五逆

〈九丁裏〉

- 06 雖無道心思弥陀ニカケタリ極樂往生求便有者也即身
 - 07 成仏モ乱行不浄身思力カルヘキニ非直至道場五縁具
 - 08 足セズハ不可叶一先易行ニ安養浄刹詣且極樂人民成
 - 09 永五道六道帰無慈悲菩薩トモナヒ智慧聖衆ニ
 - 10 ムツレテ真言教ヲモ習清浄法花経読誦奉漸仏道
 - 11 増進等覚妙覚位□□崑崙山登者上下
- 〈九丁裏〉
- 01 キラハス玉□□我国生□：□還事無故也
 - 02 問阿弥陀経云少善根者極樂往生難云何纔
 - 03 弥陀名号唱テ往生スト云答少善根者極樂往生
 - 04 往生極樂本懐遂難善明天子宝財王子成仏素
 - 05 懐トケサリシ少善根修故也提婆達多六万歳聖教
 - 06 読雪山童子半偈為身投シモ大善根不可云一即
 - 07 経云一日七日念佛者彼国極樂界可生云与諸聖衆現
 - 08 在其前是人終時心不顛倒即得往生極樂国土云ヘリ
 - 09 可一念仏三昧勤修者大善根修云事念仏大善根成故臨
 - 10 命終時十念成就往生本願遂也例十念不及ニ云
 - 11 若一返往生云法鼓経苦患間無セメテ観念

12 不及^ト云^トモ西^ニ方^テ向^テ其^ノ方^ニ阿^ノ弥^ノ陀^ノ仏^ト御^スト思^フ、往^ス生^スル^{コト}ヲ

〈一〇丁裏〉

- 01 得^ト口^{ヘリ}爰^ニ以^テ善^ク道^ヲ和^シ尚^シ雜^ニ修^ス百^ニ一^ニ往^ス生^スル^{コト}ヲ得^テ專^ラ
- 02 修^ハ百^ハ往^ス生^スル^{コト}ヲ得^トハ云^モ也雜^ニ修^ト云^ハ仏^ノ造^リ經^ヲ誦^シ戒^ヲ
- 03 持^テ檀^ヲ施^シ行^フ申^ス也但^レ其^レモ往^ス生^ス助^ト業^ト功^ニ徳^ニ無^ニ非^ニ專^ラ修^申
- 04 一^ニ向^テ阿^ノ弥^ノ陀^ノ仏^ヲ称^ス念^スル^ヲ云^モ也サ^レハ法^ノ照^ノ禪^ノ師^ノ五^ノ会^ノ讚^ス申^ス文^ニ
- 05 彼^ノ仏^ノ因^ニ中^ニ立^テ弘^ク誓^シ聞^ク名^ヲ念^ス我^ノ衆^ヲ來^テ迎^テ不^レ簡^ニ貧^ニ窮^ニ与^テ福^ヲ貴^ニ
- 06 不^レ簡^ニ下^ニ智^ヲ与^テ高^ニ才^ヲ不^レ簡^ニ多^ク聞^ク持^テ淨^ク戒^ヲ不^レ簡^ニ破^レ戒^ヲ罪^ヲ根^ヲ深^ク但^レ使^テ廻^ル
- 心^ニ多^ク念^ス仏^ヲ
- 07 能^ク令^テ瓦^ノ礫^ヲ變^テ成^シ金^ニ此^ノ文^ノ意^ハ貧^ニ窮^ニ富^ニ人^ヲモ不^レ簡^ニ有^テ智^ヲ無^ク
- 08 智^ヲモエ^ラハス持^テ戒^ヲ破^レ戒^ヲイトハス只^ニ念^ス仏^ヲ者^ヲ以^テ能^ク石^ヲ瓦^ヲ變^シ
- 09 金^ニ成^シ如^シ往^テ迎^テ道^ノ綽^ノ禪^ノ師^ノ安^ニ樂^ニ集^ス此^ノ念^ス仏^ノ三^ノ昧^ノ犯^ス罪^ヲ
- 10 者^ノ也破^レ戒^者守^テ也先^ニ道^者知^ル也盲^者者眼^也愚^痴者
- 11 智^恵也愚^情者灯^也ト申^{タル}力^ヲ花^ノ嚴^ノ經^ニ云^ハ有^テ放^テ光^ヲ明^ヲ
- 12 名^ヲ見^テ仏^ヲ彼^ノ光^ヲ覺^シ悟^ス必^シ見^テ仏^ノ命^ヲ終^ス主^ト昧^ト

〈一〇丁裏〉

01 之後^ニ生^ス仏^ノ前^ニ又^ハ文^ノ意^ハ… 仏^ヲ見^テ奉^テ名^ヲ彼^ノ光^ヲ

02 命^ヲ終^ス者覺^シ悟^ス念^ス仏^ノ必^シ見^テ奉^テ佛^ノ後^ニ佛^ノ前^ニ生^ス

- 03 觀^テ無^量壽^ノ經^ニ云^ハ光^ノ明^ノ遍^シ照^ス十^ノ方^ノ世^ノ界^ニ念^ス仏^ノ衆^ヲ生^ヲ撰^テ取^テ不^レ
- 04 捨^テ文^ノ光^ノ明^ノ遍^シ照^ス十^ノ方^ノ世^ノ界^ヲ照^シ念^ス仏^ノ衆^ヲ生^ヲ不^レ捨^テ給^ト也我^等
- 05 罪^ノ業^ノ深^ク重^ク過^テ去^リ諸^ノ佛^ノス^テラ^レ奉^テ現^ニ在^ス諸^ノ佛^ノ利^ニ益^ヲ未^レ顧^ル
- 06 弥^テ陀^ノ如^シ來^シ念^ス佛^ノ者^ヲス^テシ^テ誓^シ給^テ無^レ始^シ生^ス死^ノ業^ノ障^ヲ撰^テ取^テ不^レ捨^テ
- 07 光^ノ明^ノ照^シ消^シ失^ス往^ス生^ス極^ニ樂^ノサ^ハリ不^レ可^ク有^テ此^ノ念^ス佛^ノ三^ノ昧^ノ往^ス生^ス
- 08 求^テ者^ヲ為^テ恒^ニ可^ク入^テ事^ヲ法^ノ照^ノ禪^ノ師^ヲシ^テ給^テ侍^ス此^ノ界^ノ一^ノ人^ノ念^ス佛^ノ名^ヲ
- 09 西^ノ方^ノ便^ニ有^テ一^ノ蓮^ノ生^ノ但^レ使^テ一^ノ生^ノ常^ニ不^レ退^ス此^ノ花^ヲ還^テ到^テ此^ノ間^ニ迎^テ文^ノ意^ハ
- 10 此^ノ界^ニ念^ス佛^ノ常^ニ申^ス西^ノ方^ノ蓮^ノ花^ノ成^シ生^ス其^ノ蓮^ノ花^ノ金^ノ蓮^ノ台^ニ
- 11 成^シ彼^ノ蓮^ノ花^ヲト^リテ觀^テ世^ノ音^ノ菩^ノ薩^ノヒ^チヲ^ノヘ^テ念^ス佛^ノ者^ヲ迎^テ給^テ也念^ス
- 12 仏^ノ不^レ申^ス人^ノ西^ノ方^ノ一^ノ蓮^ノ花^ノモ^アル^マシ^ケレ^ハ觀^テ音^ノナ^ニノ^セテ^カ力^ヲ迎^テ

〈十一丁表〉

- 01 給^テ爰^ニ以^テ三^ノ時^ノ集^ス云^ハ文^ニ念^ス佛^ノ蓮^ノ不^レ乘^ス者^ヲ單^ニ安^ニ養^ス淨^ニ利^ニ
- 02 申^{タル}也播^テ磨^シ國^ニ沙^ヲ弥^ヲ教^ヲ信^ト云^ハア^ノサ^マシ^キ最^ニ下^ニ郎^ヲ有^テ
- 03 常^ニア^ミタ^ノ名^ヲ号^ヲ唱^テマ^ツシ^キヲ厭^テ極^ニ樂^ヲ願^フ身^ヲ売^テ目^ヲス
- 04 事^ヲシ^ケリ依^テ之^ヲヤ^トヒ仕^人ア^ミタ^ヲ丸^ニ云^ハ其^ノ時^ヲカウケム天^ノ
- 05 皇^ノ御^ノ時^ニ有^テ亦^ハ津^ノ國^ノカ^コホ^リノ人^ヲツカサ^テ左^ノ衛^ノ門^ノ府^ノ生^テ時^ヲ原^ノ助^ト

06 道妻ハ出羽国総大判官代藤原吉家娘也然而夫妻間

07 年来具 子一人無事數月十五日コトニユアミ精進

08 堂寺詣男子生祈一二年経程既ハラミテ天応元年

09 辛酉年四月五日男子卒生 悦養程七歳成 其時

10 母世間事トモ倦クテ常物憂歎 体有夫是怪問云

11 何事有 色形違例様 無 妻答云様産 子漸七

12 才ナリタリ今 成偏 仏 〓レトモ夫隨身 思

〈十一丁裏〉

01 歎ナカラ徒日送也夫此 〓 〓カ人シレス思ケルコト

02 実貴事也我同頭ソ 〓 〓念仏セム兎ヲイテハ他人云付

03 ヤシナハセムト云チコ耳ソハタテ此間後アソヒタハフル事

04 セステ籠 居 其アクル朝之食僧來門立 此時兎母

05 〓 呼入供養云様我カミヨソラムト思也ト云僧様ナト未

06 年ヨリ給 病クナントノ憂 無尼成 思食 此実目出

07 功德也ト云夫モ是聞弥悦共頭ソリツ 此時夫四十一妻三

十三也次

08 七才成 兎聞頭ソラムト云アハレミテ頭ソリツ共戒受畢

09 此僧留居 経教ヲシヘ念仏勸兎名 勝如名此少僧阿

10 ミタ経ヲシウ如是念誦ラス、メテ弥此世界イトハシム

三年許有

11 此僧出先 延曆十四年乙亥二月十八日朝夫入道尼公同

12 共ユアミテ経読仏念奉其日夜半計二人ナカラ病セスシテ

〈十二丁表〉

01 命終此時家内男子此事不知只勝如一人カタハラニ有

02 金打仏御名唱近隣人々驚此間怪哀 一周忌既畢

03 勝如不軽行修十六万七千六百余家礼拜 事得タリ此功

04 徳 〓 父母廻向畢不怪ヲカム間門々重時芳香自カヘキ

05 此間見人々皆怯貴 其後津国勝尾寺登聖師 頭

06 密聖教習読 七年経畢閑属定後草庵ムスヒテ

07 念仏三昧修五十余年間仏法アチワヘテツカレワスレ

テ極楽

08 願 五日有一食 物語ヲ留テノトカ二十二年有 此時真観

八年八月

09 十五日夜空妙 音楽音聞 怪事哉思合 人来シハノ戸

10 タ、クニ不言 間ナレハシ 〓キヲシテ人アリトハシラシム

此時戸外人

11 語云我是^ハ磨国賀古郡賀古^ハ駅^ハキタノ^ハ辺年来^ニスミツル
12 沙弥教信也^ハ今極楽^ハ年^ハ今^ハ今夜極楽^ハ

〈十二丁裏〉

- 01 迎得^テ給^ヘキト此聖^ハ其間細^キ光^リホノ
- 02 カ□シア庵^ニ内入^ル妙^ハ西方^ハスキ又^ニ此時勝^ニ如^テヲ
- 03 トロキ怪^テ夜^ノアクルマ、ニ少僧使^トイソキ沙弥教信^カカ
- 04 実不尋^ズ遣^ス少僧夜^ル昼^ス不^レ云^フ彼国^ニ至^リ道^ニアフ人^ノコトニ
- 05 教信^カ往^ル生事^ニ問^フ更^ニ答^フ者^ハ无^クホノカニ見^レ遣^ハ彼^ノ駅^ニ地^ニ少^キ
- 06 イヲリ有^リ其庵^上アタリテトヒカラスト云^フ鳥カケル漸^ニ近^ク付^テ見^ル
- 07 犬^ト集^テ死人^ノ喰^ヒ僅^ク大^キ石^ノ上新^キ頭^ニ有^リ形^モ色^モ不^レ損^ル目^ヲ
- 08 口^ノ程^ワラヒタルニ似^タ芳香^ニ里^ニミチク^クタリ亦庵^内見^ル老^女
- 09 小童^有相^伴ナキカナシム此時^ニ哀^{ナル}心^ハセヲ問^フ女^答云^フ様
此^ノマヘニ
- 10 候^人自^ハ夫^カ沙弥教信^也去^リ十五^日夜^ニ死^候也^ハ今^日三^日罷^成
- 11 是^ツ貧^候者^也只^今生^間アミタノ御名^唱夜^昼ワスル、事^無
- 12 是^ツツネノ事^ト仕^リサレハヤトヒ仕^人くアミタ丸^トヨヒ
候^只人^ヤトヒ

〈十三丁表〉

- 01 仕^レテ日^ヲ送^テ事^ヲ許^テ仕^シ也^ハ加^シ様^ニテ十二年^ノ経^ル也^ハ此^ノ童^ハ此^レ
 - 02 子^也諸^共年来^ニ便^シ何^レ世^有スラムト歎^泣也^ハ此^ノ時^ニ村^里
 - 03 男女^往返^シ通俗^ノ僧^来由^聞星^如馳^雲如^アツマリテ
 - 04 彼^石上^ノ生^頸遠^或ヲロカニ滅^罪悔^成往^生由^聞
 - 05 勝^如思^様年来^ニ物^語留^静居^{タリ}シヨハ教^信阿^ミタノ
 - 06 御^名唱^テ里^中有^ニ実^是多^人利^益目^出行^ケリト
 - 07 思^トリテ同^日廿^二日^静所^出テ^テ村^里更^リテ我^人トモニ念^仏勸^ム
 - 08 明年^ノ七^月晦^日マチハ申^同八^月一^日日本^所還^{十五}日^至
 - 09 堂^出ユヲアミ潔^サイシテ弟子^告云^様教^信告^事今^日ユ
 - 10 サリ也^ハ今^生物^語奉^今度^許也^ト云^テ渡^ヲサヘテ別^ナレスル
 - 11 事^云堂^入前^備五色^糸御^手ツケテ
 - 12 定^印如^月影^閑松^程空中^樂音
- 〈十三丁裏〉
- 01 ホノカニ二^聞芳^香漸^音合^念仏^聞人^ト
 - 02 歎^喜少^光照^満聖^人西^方向^テ
 - 03 閑^居命^畢其^年八十^也弟子^共或^悲歡^{上下}
 - 04 人^く二百^余人^也三十^日夜^昼彼^カバネヲ^遶念^仏不^絶此^レ

12 奉^シ云^フ官人承引^セ奏聞^ス不及^ス、雖然此事自然^ニ聞^ク

〈十五丁表〉

- 01 姫太子ヲ^ト大臣公卿諸共^ニ余若^クトテ彼罪滅^ス
 - 02 人獄^ニ只出^テレウチヲ加^シ云^フ如國王病ヤミ給^テ即本^ニ
 - 03 フクセリ犯罪許^シ高位昇^リ福祿給^ル臨終^ノ十念^モ亦
 - 04 復如此百年間四重五逆ヲカシテ地獄^ニ墮^リ人臨終^ノ十念^イレ
 - 05 ウノ奉^ニ依^テ往生極樂勸賞^ニアツカルヘキ也有人百年間奉公
 - 06 人勝官祿^心任^テ肩並^テ者無^シ此人俄謀反^心出来^テ其罪
 - 07 タ、チ二頭^レ禁獄流罪セラレテ死罪行^ハル、カ、如^シ百年間
 - 08 大善根者^ト臨終^ニ妄念^ニ依^テ故生死^ニ可留^也知^ル後世^ノ善惡^ハ
 - 09 臨終^ノ念力^ト可依^テ云事^ヲサレハ臨終^ノ行儀^ニ注^{タル}文侍^ニ阿弥^タ仏
 - 10 西ヤマニカケ病者^ノ面^ニ西^ニ方^向五色^ノ糸^ヲカケテ病者^ハヒカヘ
- サセヨ土
- 11 沙加持^シ病者^ノソ、ケ五辛并酒肉不可寄^ニ五辛^ト云^ハ大ヒル
 - 12 小ヒルキアサツキクシノヲモ[□]：[□]妻子情思^ト財不可見^ス
- 〈十五丁裏〉
- 01 人多不可寄善知識[□]：[□]念仏^ヲス、メ往生^色ヨリ

02 外他色^ミセス往生^思ヨ[□]外[□]思交^ヘサシナントソ申タ

メル天

- 03 竺^ノ長者金^ノ金^ノ恪^ノ思^ハ大地成^中□タカマル舎^工国^ノ女人^ハ
 - 04 我形^苦思^テ着^セシカハトクロノ内^ノ虫^ト成^天竺^震旦^遙
 - 05 侍^リ我朝廷^曆寺^ノ無^空律師^ノ房^天井^銭一文^ヲ置^タリテ
 - 06 臨終^ノ時^思出^タリケル故^地成^銭中^ノ御^シケル年^来檀^那
 - 07 ヒロ□大臣伴^平文^ニ見^タリケリ四^禪比^丘地獄^相現^慈童
 - 08 □天上^報受^シ一念^ニ依^テ過^去アウム^タシト云^人仏^申云^何百年
 - 09 仏道^修行人^地獄^ヲチ百年^罪作者^淨土^往生^者地獄^ヲツルハ臨
 - 10 ツタシニ告^言百年^罪作者^淨土^往生^者地獄^ヲツルハ臨
- 終^ニ惡^念
- 11 ヲコス也百年^罪作者^淨土^往生^者臨終^ノ十念^具者^也トソ
 - 12 仰^ラレケル問^臨終^ノ十念^前世^宿因^ヨル也サレハ我等^兼
- 〈十六丁表〉
- 01 念^仏修^セ□トモ縁^有十念^具足^淨土^往生^何答^往
 - 02 往生^極樂^前世^宿因^可依^也法^相宗^今度^往生^遂
 - 03 事^可離^一設^行業^限有^云トモ二^生三^生往^生ヘシト侍^メリ
 - 04 天台^觀念^成就^シテ往^生可^遂ナント申^クルタル西^塔学^者

05 益智後三条院未東密申ケル時メサレテ答云極樂ト

06 都率何願御尋有アルニイカニモ不可叶但須弥山辺

07 行法ナントスルヲミ生願侍ルト申侍益智天台願

08 学也イカニサハ申侍只此念仏思心運人決定

09 往生スヘキ也サレハ弥陀称念者前世宿因依決定往生

10 スヘキ也サレハ縁有トモ念仏ヲコタル事ユメク不可有

此淨土宗是

11 善導和尚勤行往生遂給後門徒人併往生極樂

12 本懷莫不遂ユメク勿〇〇〇〇拂如可称念也一条院

〈十六丁裏〉

01 御時延曆寺宣旨〇〇極樂求人可持文檢

02 申被仰侍リケレハ各学生集一切経論引若有業障

03 無生淨土因乘弥陀願力必生安樂國極重惡人無他方便

04 唯称念仏得生極樂矣淨土可生二因无亦他方便无ラム

05 者弥陀願力乘極樂往生侍メレ此念仏三昧返く憑

06 ソ侍此故西方向弥陀兩足拜弥陀無上念王申時過

07 去空王仏拜正覺取給故也或時淨土依正思惟波ヲト

08 鳥音十方無畏法文也ト思道珍禪師地観往生遂

09 海雲比丘海向淨土因得有時十惡五逆エラハス来迎

10 引撰云本誓悲願恭事隨喜成時眉間白毫五

11 須弥ヲホキナルヲキサシテ十方界照御眼能澄四大海様

12 広思御声俱摩羅云鳥声勝事讚歎成時

〈十七丁表〉

01 心淨利澄テ一向名号称念ス高声少声心任ハス高声

02 太仏ミ少声ハカス積ル申タル淨土宗行者申称念ヲ

03 先スル也身口意勤余行スル故也問并州生者七歳成弥

04 陀念故極樂往生云七歳イカ功徳心可知哉答弥陀名

05 号唱レハ有智無智不云極樂往生也譬暗所往者ソソクヲ

06 以行暗ヤミハハルヘシト知往暗ヤミハハレヌ物心不知少

07 者ヤミハハルヘシ名号唱者極樂往生也問賢首仏淨土莊嚴

08 比極樂下品也ト云積迦五百大願並弥陀四十八願物

09 カスニ非ナンソ極樂願ヲシヘ弥陀悲願可仰ト云ヤ答賢首

10 仏淨土極樂勝云我等衆生誓淺過去世遶王仏申仏

11 十方淨土現給弥陀見給其中奇妙莊嚴エリ取極

12 樂合成給也又教主釈尊韋提希夫人阿闍世王申御子惱

〈十七丁裏〉

- 01 歎給之比人間□タテク情無□□利願給帳内若ニテ
 - 02 浄土現給中此西方極楽□国へ参ラト申給イ提希夫人
 - 03 只人御ハ易往故極楽浄土願給也賢首仏浄土奇妙也
 - 04 云トモ只有縁極楽願釈迦五百大願忝 弥陀来迎引願
 - 05 云トモ惡五逆犯者也ト云トモ我名号唱テ我國願者往不迎
 - 06 云者正覺不取誓給此故弥陀称念ヘシト云也末法万年猶シ
 - 07 弥陀一教ヲ憑ムヘシト云況仏法流布近來於テ未法万年弥
 - 08 陀一教憑ヘキ事譬以教給 例 大國々王有政閑直
 - 09 国収民易雨ツチクレヲ碎事無馬花山放但恨 一人儲君
 - 10 ヲロカニシテ国可保器非大王此事歎悲太子教云我無ラム時
 - 11 国乱財尽時此ホリ出身命助云置数千両金土中
 - 12 埋置大王一期運命尽ホウシ給太子国請取政致云トモ
- 〈十八丁表〉
- 01 可持政暗 鹿馬マトイヤスシ異国此事伝聞数万軍兵
 - 02 引率 金銀琉璃瓊瑤瑠始 國中五殺七宝残一
 - 03 無運取還マ其時愚 太子父王埋置給金土中ホリ出テ
 - 04 身命助給也釈尊父大王金生死泥中埋置給也釈尊

〈十八丁裏〉

- 05 大王梅檀煙ト昇給異國魔王軍兵ト云者トモ乱入法花
 - 06 真言金銀般若華嚴車璫瑪瑙云君子財一残物無運
 - 07 取還時弥陀一教金生死泥中朽無ラシテ身命可助也
 - 08 爰以末法万年余経悉滅弥陀一教利物偏増申タル也
 - 09 長物ナカヘニ作□者ヲハクサヒニ指曲レル物ヲハ輪定メナル物ヤニモ
 - 10 千井明王車造如弥陀人ステ給 亦復如是直人ヲ
 - 11 上品蓮台マウケテ迎給マカレル物ニ下品下生マウケテ導
 - 12 給亦阿弥如来人ヲ捨給 明王車ツクルニ似 仏相人
 - 13 例ヲ以テ言□弥陀名号称念スル者ハ決定往生相有人ナリト
- 〈十八丁裏〉
- 01 相給也大王阿弥陀仏相人ハ婆羅門我朝 伴門平縁照法師
 - 02 相猶シ無疑 況大聖牟尼尊慈悲御眼以テ相ソコナイ給
 - 03 ヤ念仏是決定往生相有行也野カケ山カハリ勤メ行ハス
 - 04 トモ一向弥陀称念シテ静極楽ハ詣給シユメク勿生疑 弥陀
 - 05 専念者極楽往生疑 往生ヘシト云論議侍也少智菩提
 - 06 サマタケト申往生業無者念仏往生 疑侍也決定往
 - 07 生思ヲナシテ猶々タユム事无弥陀仏称念給ヘキ也璽珞

08 璣利色ナツカシクカヲラハ極樂宝蓮思出谷鸞山

09 鸞軫ハ水鳥フカムノ五根五力文唱事観浄土莊嚴

10 浅深観也雖十惡猶引損甚於疾風披雲霧

11 雖一念必感応喩之巨海納絹露一度南无阿弥

12 陀仏云人ハチスノウヘテホラヌハナシ空也聖人後中書王ハカ

〈十九丁表〉

01 ナク書給筆スサヒ〇モ滅罪生苦事ハリハ聞空也聖人

02 阿弥陀コトハニヨミステ給ヘル三十一字中一称南无心頭

03 侍サレハ我山源信僧都一代聖教曇無頭密二道不暗

04 御〇セシカトモ恵心院ノ壁来迎引抄カタヲカキテ常見

05 常観シテ往生素懐遂給也行住臥西方ソムク事

06 无弥陀ワスル、事ナカレ幡磨国印南野沙弥教信馬

07 牛食トシテ汚穢不浄者也津国勝尾寺勝如ハ無智無

08 悲法師也右大弁佐世妻ハ好色美女也僧観忠力姉ハ破

09 戒無暫アマナリ〇〇トモ弥陀念仏力依故往生極樂本意

10 遂此等ハ念仏功積運心年久但須臾念力依往生

11 タル事少々勘申ヘキ也讃岐国多度郡云所源太夫不知其名

12 ト云武者有ケリ仏法名字ト云事不知テ齡中半スキタリ

13 鹿鳥ヲ殺ラ以テ朝夕遊人手足ヲ切以テ毎日政トス源太夫

〈十九丁裏〉

01 十月許狩出時雨シケレハ人里見所馬馳行萱堂

02 有ケルニ仏供養スル所有テ聴聞人々多集有源太夫目

03 嘖〇テ云此何事スルソ収納盛リ多人ヲ集テ徒置

04 ト云ケレハ人々ヲチワナ、イテ我等一定手足モ切ラレナン

ト思セテ

05 怖居程タルニスル法師ナニト有ヨカルマシ同乱思

06 ヲソロシカリケ〇〇ニ仏供養侍也云仏何云仏供養

07 タラハ何事可有問ケレハ中く物イハテモアシカリヌヘカリ

08 ケレハ此ヨリ西国有極樂世界名彼国仏御阿弥陀

09 其仏ヲ供養恭敬シ名号ヲ唱レト必往生シテタノシク侍也ト申

10 〇〇源太夫気色直リリ我レ参ナンヤト何様ニシテ可参ト云

11 僧云人キヲウ国非男参リスケレモ仏御弟子申法師

12 成西方ニ向テ南無阿弥陀仏唱ヘテケハ必ス参也ト云ケ〇サハ

13 参ラトト云々、チニ法師成聖衣取着西方ニ向テ南無阿弥陀

〇二〇丁表

- 01 仏^ト唱^レ野山^ヲキラウス行^キレハ郎等^トモマトヒサワキテ留^ム
- 02 我^レ樂^ム所^ヘユカムヲハ何事^ム留^ム腹^立レハ此人^ノ日来^ニ心誠^ヲ
- コ、ロエテ
- 03 シイテ留^ム悪^カリサント思^テ力^ヲ不及^テカヘリニケリサテ何成^{カタルト}
- 04 不^ニ審思^ヒ間跡^ヲ尋見^テケレハ西海^ノ向^テ松木^ノ有^ル登^リテソノ死^ニ
- 05 タリケル口^{ヨリ}青蓮華^ヲ生^テ芳香^ヲミチニヨヒテ往生^ノ相願^ス又神崎^ノ
- 06 遊女^トネクロ八年^ノ来色^好仏^ノ経^ノ名字^ヲ不知^ニ昼船^ハタヲ
- タ、キ
- 07 夜^ハ船^ニノリテ往還^ノ客身^任ス舟内^ノ波上^ニシテ一生^ヲ送^ル人也男^ニ
- 08 相具^テ西国^行程^ヲ海賊^アヒテアマタ所手^ヲヒテ死^{シケル}
- 09 時^ニ西方^カキム^ラレレテ我^ナニシテ老^ヌ思^ハハイトコソ
- 哀^レナル今^ハ
- 10 西方^極樂^彌陀^誓念^スヘシト云^フ今^ノ様^ヲアマタ、ヒウタヒテ息絶^ヘ
- 11 命^ヲ尽^{ケル}西方^{ヨリ}紫雲^タナヒキテ異香^船内^ニホウト云^リ
- 12 無^ニ下^ニ近事^侍ヘルリ亦^丹波^国凡^ノ為^良ト云^人具^テ天王^寺ヘ
- 13 参^テ遊^行ケル程^忠胤^僧都^ト云^説経^師西^門 仏^供養^{シケルヲ}

〇二〇丁裏

- 01 聞^{ケル}ニ阿^彌陀^仏名^号唱^レ西方^彌陀^イテ来^給也例^ハ
- 02 人^子父母^ヲヨフニイラヘヌ事^无仏^ハ一切^衆生^ヲヤナレハ
- 子^{ヨフ}
- 03 音^ヲ聞^テ給^{ナリ}トミチレハ為^良ク法師^ソラ事^スル
- 04 頭^{サム}ト云^テ阿^彌陀^仏ト一日^一夜^唱ニ仏^出給^ハサレハ
- コソト
- 05 云^テサモ有^今一日^一夜^申サントテ称^念スルニ仏^イテ給^ハス三
- 日^四日
- 06 五日^六日^称念^スルニ仏^イテ給^ハス此^程成^ニ七日^申サント
- 07 テ唱^ルニ七日^云成^時許^イテ給^此僧^実云^{ケリ}トテ渡^流
- 08 掌^ヲ合^テ南^波海^方歩^{ヨリ}テ高^声念^仏丑^時及^病無^シ
- 09 死^ス是^恒往^生相^也極^樂往^生春^細雨^如侍^メレハ
- 10 斯^ヘ申^及侍^{ラス}念^仏是^例ハ武者^腰刀^如武者^軍
- 11 陣^出テ、タ、カウ時^五八^四十^矢背^イツクシテ太^刀ナキナ
- タ^皆□
- 12 折^カタキニトリコメラル、時^腰刀^付身^{ツイ}テカタキ
- ヲ^モ取^自害^ヲ

△二丁表

- 01 シテ高名ヲモスルナリ利生□□モイツ□□テ戒律檀施ノ
- 02 太刀刀ナキナタモ打折身随事無タ、身随モノトテ□念仏
- 03 腰刀也十念一念高名シテ極楽ニ往生スルハ念仏腰刀也例
- 04 □□力ツヨキ弓有此弓遠箭ヲハシラカシテ物ニツヨクア
タリテ
- 05 人為第一財也或人此弓エテイムトスルニ我力溺ヒク
ニタニモ不及
- 06 余行ツヨキ弓力ツヨキ行者為目出宝也ト云ハ少根少機
- 07 我等可持ニ非只念仏ユハキ弓ヲ以テ心任イハ往生極楽マ
トニイ
- 08 アツル事有ヘシト也例ハ人有ユヲワカサムトスルニ薪
少クテ大金ニテ
- 09 ワカシテ人ニ多アムシ我モヨクアミムトテ大金水入テ
ワカス程薪
- 10 □□ウセテナマヌルニテステツ有人タキ、ノ有程ヲハ
カラヒテ少釜水
- 11 入ワカセハアツキユニ成アミツ自余行業モ如是自余行
業大金

- 12 ユハワカシ□、セ□ハ人多渡我身塵垢アラヒスツヘキニ
- 13 ナマヌルニテステツ念仏小釜ユハワカシタテ、ヒト身
□クアミテ生死

△二丁裏

- 01 垢ヲモヲトシテ往生本懐トクル也有人遠國ハ行舟乗ホヲカ
- 02 ケテカチヲ取りテ行カハホトアルマシト思カセニ任テハセ
ユク程ニ自
- 03 西風アヒテ舟モ損シ我アヤマチヲスル也或人カチヨリ
ヤハラ
- 04 ツ、行スレトモタ□ニユキツクナリ自余行業ミチハ
ヨクコキツケハ
- 05 ホト無行スル事イテクル也念仏カチミチハ不浄ヲモエラ
- 06 ハス漸行程恒淨利ユクナリ或人は腰イタラム力遠
- 07 国行ハケマムニ□生界不行付サルホトニ舟乗ホカ
ケテ行
- 08 程無可行付也余行カチノ如念仏舟乗行如シト云ハリ善導
- 09 和尚定入テ行法給阿弥陀如来必道場現シテ物語給
- 10 □□道緯禪師ノ往生スヘキ事尋申給ケレハ木切ラム時

- 11 □キリニ斧ヲク□□家還ラム時ハ飢ヲワスレテ歩ヲ運ヘト仰セラレ
 12 □実木切ラムニシキリニ斧ヲクタセ□疾切畢ヘキ也家還ラム時
 13 □カレヲワスレテ歩ヲ尽セハトクカヘルヘキ也知往生
 求ム者頭ヲ□□

△二丁裏

- 01 拂力如シ勤修シテ極楽生ヘシト云事サレハ念仏行人念□
 02 □ケルヲ人物申サント申ケレハ火急大事有イラ□モセサ
 03 □ケリトコソ申侍リ極楽願ハム人他念無念仏スヘ
 04 キコト例ヲ以テ申侍ヘシ例ヘハ大國々王有第一太子儲
 05 君有太子遊ヲ興シテ野交リ山入道ヲフミ違ヘテ隣
 06 国迷行隣國王是得奴婢成テ任太子我國ヲ
 07 願ヒ父□□恋ト思ハムカ如シテ極楽願ヒ弥陀恋奉ヘキ
 08 也例ヘハ人□□道行道ニ盜人行合此人命惜ミ
 09 □取□□為遠行程道中大河有此人思様
 10 □□ヲヌイ□渡ラ盜人追付衣キナカラ渡ラハ
 △二丁裏
 01 □ヲホレテヤ死スラムト思カク常ニ心懸奉テ弥陀ヲ

- 02 □奉ヲ臨終正念ニシテ弥陀光明放チ觀音蓮花
 03 台傾大勢至來手サツケテ迎取給様アリ
 04 琰魔王宮 罪輕重定後極楽往生スル様有リ
 05 極重罪人地獄ヲチテ後往生スル様有リ或ハ有リ活ク
 06 炎魔王宮事ヲ語テ云智光禪師ト云人形ヲカキテ
 07 炎魔王宮カケタリ故問ニ上品上生往生シテ炎魔宮
 08 來ラサル人ナルカ故形書留也トソ申侍ケル過去ニ
 09 人ハラ門リ有邪見放逸ニシテ仏法信事ニ無妻□此之
 10 事歎悲ニテ功德ツククレト□教論ス婆羅門アサケ□

△三丁表

- 01 □ロシメテ全承引無妻不及力ニスクル程西□
 02 月落中殿灯残テ□声□哀シテ鐘音身□
 03 ル曉妻善悟テ云ケル様汝漸年序重ナリ□□
 04 冬霜白額 四海波々、メリ無常殺鬼ト云者貴賤
 05 賢愚モエラハス情無者 一期運命尽ナムノ後悔シ
 06 □ムヘキニ非ク苦患ト云事ハ只今事非ヤ我々ト
 07 思ハ常ニ佛ヲ称念セム事雖曉鐘音ニ時南無阿
 08 □□□サラ□我ニイトマヲエサスヘシト云ケレハサス

09 □：□不浅故曉鐘声^ニ度^ト南无^{スル}
10 □：□唱波羅門病付命終時阿妨羅刹

△三三丁裏

01 □：□炎魔王宮流^ニ重罪者^ノ故大地^ニ
02 □：□鉄杖^ヲ持^テ罪人^ヲ打程打^ニハツシテ
03 地□：□ツ其音在生時曉鐘如罪人昔^ノ
04 鐘音習^ニ南無阿弥陀仏^ト唱時地獄釜破サケテ
05 清涼池^ノ変^ニ四色^ノ蓮花^ノ忽開^テ往生事得^リ若人造□

06 罪心墮地獄中纒聞弥陀名猛大火為清涼^ト云是也

07 亦弥陀仏名唱^ル者自地獄^ニヲチタラム時弥陀金翅

08 鳥王成地獄鉄城蹴^コホチテツカミ取給也知往生^ノ

09 様々カワル□□□トモ弥陀一仏カマエナリト云事昔^ノ一

人□□

10 有魚^キツリテ一生送何^{ナル}事有^ル魚取^ラサリケレハ網

△二四丁表

01 人此事歎悲ケルニ戊□阿弥陀仏^ト唱^レハ魚

02 必取^ス也ト云ケレハ網人往生^ノ為^ト云事^ヲ思ハスシテ□□

03 為此^トナフ網人命終時往生相顕況^ヤ一念也^ト云
04 往生極楽為阿弥陀仏^ニ廻向奉^ラムヤ終往生素

05 懷^テ遂^テ聖衆来迎預^{ラム}事観^{シテ}且歡喜思ナセ

06 万徳莊嚴教主西方顯^ニ漸^レ近付^キ九品蓮台聖衆

07 紫雲牽次ナ、メニ下^リ無量光明普カ、ヤキテ

08 億千日月集如宝蓮雨如フリテ異香梅檀芳^ノ

09 □□彼□□心降^テ漸^ク無始生死罪障滅^ス諸尊

10 □：□聞歡喜涙□□観音金蓮台傾

△二四丁裏

01 □：□授^テ引撰給^ニ弥陀^ノ後随^テ須臾安養

02 □：□蓮中有無數快樂^ノヲテ^リテ^テ弥陀観音金蓮

03 □：□行□□授^テ引撰給^ニ遂^ニ弥陀^ノ後随^テ須

04 弥陀観音説法聞仏道増進思添蓮花初開

05 染例取物无尽虚空^ノ莊嚴眼雲路ツカレ転法

06 輪響聞宝刹滿^{タリ}訶瓔珞地跪滿^ル月尊容礼七

07 宝橋登^テ梵音和雅御声聞黄金池^ノハリノ水^ヲ

08 タ、へ真珠樹^ノ車渠菓結^フカムカハシアウハ五根五力

09 妙文^ヲ転^ル浪音風声ハ十力無畏経論唱^テ天^ヲ仰^{ケル}

10 玉璣^ノ瓔^ヲ珞^カケ地^ニウツフケハ金繩^ノ道^ヲ堺^フ亦^ニ天翔^ニ遊^ハ□
 11 行^ニ心^ニ亦^リ地^タハフ^レテ步^ス忍辱^ノ宝^ヲ衣^ヲ布^ケリ□

〈二五丁表〉

01 □…□空^ハ篋^ハ微妙^ノ音^ヲ出^ス琵琶^ノ鏡^ノ銅^ノ鈸^ノ歌^ハ
 02 □…□添^ス常^ノ管^ヲ絃^ヲ歌^ヲ舞^ヲ雅^ヲナツ^サヒテ□□
 03 □説^ク□□□思^フ離^レ三^ノ世^ノ諸^ノ仏^ヲ供^ル養^ル奉^ル心^ニ□□
 04 七^ノ世^ノ恩^ヲ所^ヲ導^ル生^ル老^シ病^ヲ死^ス四^ノ苦^ヲ無^シ無^シ病^ヲ病^ヲハセ^スセ^ス
 05 □□事^ニ无^シ怨^ヲ憎^ヲ愛^ヲ別^ニ八^ノ苦^ヲ无^シ恨^ヲ无^シ別^ニ無^シ
 06 服^シ着^シ思^フ肩^ヲ力^ヲハ^リ物^ヲ食^フ思^フ前^ニ現^ス問^フ彼^ノ極^ノ樂^ヲ
 07 淨^ニ土^ニ彌^レ陀^ノ如^レ來^ノ常^ノ法^ヲ文^ヲ説^ク給^ル聞^ル者^ノ仏^ノ道^ヲ增^ス進^ス
 08 河^ノ浪^ノ音^ノ風^ノ声^ノ妙^ノ文^トナ^ク阿^ノ彌^レ陀^ノ仏^ハ無^量壽^ノ仏^ト
 09 □…□事^ニ有^シ其^ノ後^ニ觀^ル音^ノ情^ヲ取^テ極^ノ樂^ヲ
 10 □…□仏^ノ中^ノ間^ノ衆^ノ生^ノ仏^ノ道^ヲ增^ス進^ストカ^カ為^ス

11 □…□也^レ觀^ル音^ノ命^ヲ尽^テ給^ル後^ニ勢^ヲ至^テ請^フ

〈二五丁裏〉

01 □…□也^レ問^フ金^ノ鳥^ノ宮^ノ殿^ハ七^ノ宝^ヲ以^テ合^ス
 02 □…□云^ハ土^ノ類^ノ宮^ノ殿^ノ極^ノ樂^ノ同^ノ何^ノ勝^ト
 03 □…□翅^ノ鳥^ノ王^ノ宮^ハ極^ノ樂^ノ莊^ノ嚴^ノ如^トハ申^タレトモ
 04 □…□目^ノ萱^ノ原^ノ見^ル提^ノ婆^ノ多^ノ達^ノ第^ノ三^ノ禪^ノ樂^ヲ得^ト
 05 □…□鼻^ノ大^ノ城^ノ底^ニ沈^メリ彼^ノ極^ノ樂^ハ七^ノ宝^ヲ以^テ合^セ成^セリ
 06 功^ノ德^ヲ增^ス樂^ヲ得^ル樂^ヲ有^ル見^ル也^レ爰^ニ以^テ稱^シ讚^ス淨^ノ土^ノ經^ニ
 07 □…□胝^ノ那^ノ由^レ他^ノ舌^ヲ以^テ一^ノ々^ノ舌^ヲサ^キニ無^量音^ヲ出^シテ
 08 □トモツキシトハ申^タルソカシ淨^ノ瑠^ノ璃^ノ都^ノ率^ノ天^ノ勝^ノ蓮^ノ花^ト
 09 □…□娑^ノ幢^ノ奇^ノ也^ト云^ハトモ我等^ニ有^ル緣^ノ國^也極^ノ樂^ヲ可^ク願^ス也
 10 □…□往^ル生^ル者^ノ仏^ノ位^ヲ致^スラムコト遙^ク何^ノ以^テ故^ニ往^ル生^ラ
 11 □…□極^ノ樂^ニ往^ル生^ス者^ノ永^ク五^ノ道^ヲ返^ト無^シテ遂^ニ仏^ノ位^ニ

【註】

(1) 「勸化本」は、真宗学・仏教学の分野において、従来「談義本」と称されてきたが、近年の学界の動向に鑑みて、本稿では「勸化本」と呼称する。

(2) 隆寛の著作については、平井正成『隆寛律師の浄土教 附・遺文集』（金沢文庫浄土宗典研究会、一九四一年。一九八四年に国書刊行会より再刊）に収録されている。また長西の『観経疏光明抄』については、大谷派宗学院『宗学研究』九—十六号（一九三

五一―一九三七年)において翻刻がなされており、『専雑二修義』は石橋誠道『九品寺流長西教義の研究』(仏教専門学校出版部、一九三七年。一九八四年に国書刊行会より再刊)に収録されている。

- (3) ・佐竹真城「称名寺聖教『浄土論注要文抄』(仮題)について(一)―概要と上巻翻刻―」『金沢文庫研究』三四〇、二〇一八年。
 ・佐竹真城、赤松信映、西村慶哉「称名寺聖教『法事讃光明抄』について(二)―概要と巻一翻刻―」『宗学院論集』九一、二〇一九年。

・佐竹真城「称名寺聖教『往生礼讃光明抄』について」『佛教学研究』七六、二〇二〇年、など。

なお、称名寺聖教の長西著作のうち、『群疑論疑芥』巻六・巻七(九四函―五)については現在も翻刻がなされていないが、これは筆者も同行した金沢文庫での実地調査の際に、写本の傷みが激しく翻刻が困難であることが確認されたためである。

- (4) ・西村慶哉「資料翻刻」神奈川県称名寺蔵『序分義聞書』『浄土真宗総合研究』一六六、二〇二二年。

・西村慶哉「称名寺聖教『安楽集論義』に関する一考察」『印仏研』七三―一、二〇二四年。
 ・西村慶哉「資料翻刻」称名寺聖教『安楽集論義』『日本研究』七〇、二〇二五年、など。

- (5) 稲垣泰一「金沢文庫所蔵『浄土宗法語』をめぐって」『説話文学研究』三四、一九九九年。以下、氏の論攷の引用に際しては、「稲垣」〇〇頁と表記する。なお、昭和十四(一九三九)年刊行の『金沢文庫古書目録』(巖松堂)には、すでに「浄土宗法語」という仮題で記録されている。

なお、崔鵬偉「『往生拾因』における説話の受容―沙弥教信説話を中心に―」(『世界仏教文化研究論叢』六四、二〇二六年)には、「浄土宗法語」所収の「沙弥教信説話」が比較資料として用いられている。

- (6) 以下、本稿における『浄土宗法語』の引用に際しては、読解の便をはかり、細字のルビもすべて全角で表記する。また片仮名は平仮名で表記し、適宜送り仮名を付した。また、漢文の箇所についても筆者が適宜書き下した。

- (7) 山田昭全『宝物集研究』第一編『宝物集』伝本研究一(山田昭全著作集第二巻、おうふう、二〇一五年)。
 (8) 小泉弘『古鈔本宝物集 研究篇』第二版(角川書店、一九八八年)。

- (9) 「稲垣」十八頁上。
 (10) 「稲垣」十九頁上。

- (11) 「稲垣」二二頁下。

- (12) 山田昭全「康頼『宝物集』と永観、源信―山田昭全氏に聞く―」(『新日本古典文学大系月報』四八、一九九三年、十四頁。傍線は筆者)。

なお、『宝物集』第二種七巻本の第十二門には、『往生礼讃』『百即百生』の文と『観経疏』『全非比较』の文が引用されている。これら二文はいずれも法然『選択集』二行章に確認されるものである。一方で源信『往生要集』や永観の著作には、そのうち『往生礼讃』の文のみが引用され、『観経疏』の文は確認されない。この問題をうけ大場朗氏が、「一事を以て全体を論ずる危険も大いにあり、その判断に大いに迷うところである」としながらも、『宝物集』自体が法然浄土教の影響をうけて改訂された可能性を想定していることには留意しておきたい（大場朗『宝物集の研究』おうふう、二〇一〇年、三二〇頁）。

- (13) 当該箇所は、前掲した一枚の画像のうち下段のものに確認され、同画像の後ろから二行目下部に位置する。
- (14) 答えの部分で説き示される説話については、『宝物集』に依拠したと考えられる内容が多く見られるが、問いで示される問題に関する内容は『宝物集』に確認できない。
- (15) 「清浄」…「浄清」とあるが入れ替え符号あり。
- (16) 「譬」…「例」を上書訂記。
- (17) 「陀国」…「国陀」とあるが入れ替え符号あり。
- (18) 「普賢」…右傍補記。「面」の上に挿入符号あり。
- (19) 「弥」…「施」の旁（つくり）の「缶」を「尔」と上書きし、右傍に「ミ」と補記。
- (20) 「最」…右傍に「宿力」とあり。
- (21) 「毒ノ」…右傍訂記。もとあつた字は判別できません。
- (22) 「多」…上書訂記。
- (23) 「勤」…上欄にあり。「昧」と「修」の間に挿入符号あり。
- (24) 「不簡下智与高才」…「不簡多聞持淨戒」の右傍にあり。挿入符号は確認できないが、上部が破損しており、その箇所にあつたと判断した。
- (25) ルビ「ノ」…「ニモ」を上書き訂記
- (26) 「仏」…「人」を上書訂記。
- (27) 「般若」…「若般」とあるが入れ替え符号あり。
- (28) 右傍に「リ」とあり。
- (29) 「引抄」…「抄引」とあるが入れ替え符号あり。
- (30) 「トリ」は右傍補記。「二〇コ」と挿入符号あり。

(31) 「子」は右傍補記。挿入符号あり。

(32) 「ヲホレテ」の右傍に「ナカレテ□」とあるが挿入符号は確認できない。おそらく「ヲホレ」の直前の湮滅箇所にあつたか。

(33) 「エナリト」…もと「エト」とあるうち、「ト」を上書き抹消し、「エ」の下に挿入符号あり。その右傍に「ナリト」と補記。

(34) 「ソカシ」…「也」を上書訂記し、その右傍に「ソカシ」とあり。

〈付記〉 本稿の執筆に際し、称名寺住職須方隆證師ならびに神奈川県立金沢文庫御当局より、格別のご高配を賜

りました。衷心より御礼申し上げます。